

# インド留学記

その7

## 日常の日々 (3)



学授岩  
大 沢 教  
金助島

### 研究室旅行(一) — エローラへ —

プーナに来てから二ヶ月程たったころ、サン  
スクリット学科の研究室旅行が催された。二泊  
三日(昭和四九年一九〇二一日)でエローラと  
アジャンタへ行こうというのだ。エローラは崖  
をくりぬいて造られたヒンドゥー教の壮大な石  
窟寺院で、アジャンタは仏教の石窟寺院であり、  
ともにそこに描かれた神々や仏・菩薩たちの美

しい浮き彫りや絵画で有名なところである。先  
生方も何人かは参加したが、参加者の大部分は  
博士課程の学生たちで、ワイワイガヤガヤと楽  
しい旅行となった。

一九日の午後二時四五分にバス・ターミナル  
に集合し、「田舎のバスはオンボロ車」と歌い  
たくなってしまうようなバスにゆられてほぼ四  
時間、七時ごろにオーランガバードに到着。ナ  
タラージヤ(舞踊の王様∥シヴァ神)というお

おげさな名前の貧弱なホテルに宿泊することになる。五人部屋でバス・トイレ・二食付き二五ルピー（約七五〇円）だ。夕食後酒も飲まずに（サンスクリット学科の研究室の人はバラモン僧侶階層の人が多いせいか一般に酒を飲まない）ワイワイとお喋り。やっと静かになったと思つたらとつとくに一二時は過ぎていた。あくる朝は五時になるともうシヴァクマール（現プーナ大学助教授）がみんなを起こしにかかる。そして、I am sorry for disturbing you（寝ているのに邪魔して悪いね）と言いながら、とてもそう思っているとは思えないほど甲高い大声で隣で喋り続ける。「このやろう」と思いつながらこちらも凶たく再度眠りに入る。六時半ごろモンモン起きだして、Hurry up（急いで、急いで）という声を聞きながら、バス（インド人が入浴というか、シャワーを浴びるのは通常朝である）・トイレ・朝食をすませて、七時にホテルを

でて、オーランガバード駅発七時半の共用観光バス（つまり貸し切りではないが観光ガイドが一人つくということ）に乗り込む。初日は、Daulatabad Fortというモスリムの城跡、エロール、Bibi-Ka-Mugubaraという小タージマールといった風情の宮殿、Panchakki of Water Millを回つてホテルへ戻るといふ行程である。Daulatabad Fortの城跡では、「小高い山の上にごんな難攻不落という感じの城を造つても、やっぱり負けるときは負けるものなんだなあ」とあたりまえの感想を抱きつつ、ふと「夏草や兵どもが夢の跡」なんて芭蕉の句を思い出してしまい、あまりに場違いの日本的感性に自分でもつい笑い出してしまう。エローラにはヒンドゥー教と仏教とジャイナ教の石窟寺院があるが、圧巻はなんととってもヒンドゥー教の石窟寺院カイラーサである。崖を上から掘り下げていつて造つたと言われている

一枚岩でできた巨大な寺院で、下から見上げると首が痛くなってくる。寺院の回廊には、シヴァ、ヴィシユヌを始めとするヒンドウ教の神々の像が彫られ、寺院全体がまるで一つの神の世界すなわち天界のようだ。ここは今は、ちょうど京都・奈良の観光寺院と同じように、完全な観光地と化してしまっているようだが、昔インドの人々がもつと信仰深かったころには、この回廊をまわりながら神々と出会い、天界へと思いをはせていたのであろうか。澄み切った青い空のもとでこの巨大な石窟寺院を見上げてみると、ふとそんな遠大な気持ちになってきた。

エローラを見物したあと、Bibi-Ka-Muqubara と Panchakki of Water Mill を回ってホテルへ戻る。夜はまた、一二時すぎまでお喋りの渦。あくる日もこのお喋りがまた朝の五時ごろから開始されてしまうのかと思うと、つつい心の中でこんなふうになんぞ毒づきたくなくてし

まう。「インドでは『お子さんが何人お生まれになって、何人亡くなりましたか』と日常的に尋ねるほど、子供の死亡率が高いのだ、なんて言ってたやつがいたけれど、睡眠五時間たらずでこんなに毎晩喋りまくっているやつらは、その生存競争に生き残った元気印なのに違いない」などと。しかし、ともかく、毒づきながらもようやく寝入る事ができたのであった。

#### 研究室旅行(二) — アジアンタへ —

翌朝またオーランガバード駅から共用観光バスに乗り、今度はアジアンタへ向かう。そこには二八の仏教石窟寺院があり、寺院の階段を下りるとすぐ前には小川が流れている。そして、崖に掘られた洞窟(石窟寺院)の中には、ストウパ(仏舍利)があるものや、日本でも説話でおなじみのジャータカ(仏陀の前世の物語)に素材をとったカラーの美しい絵が壁に描かれ

たものなどがある。この暗い洞窟の中で、むかしむかし多くの出家僧たちは、信者たちの布施を受けながら修行を行い、瞑想にふけっていたのであろうか。

二八の石窟寺院をざっとひとまわりしたあとは、みんなで昼食をとることにする。昼食はバナナの葉の上にチャパティやカレーこふきいもなどがのったものだ。バナナの葉を直接地面にひいて、地面の上にあぐらをかいて食べるのだ。もちろん手で食べる。ときどき蟻がバナナの葉の上を散歩していく。それを適当に払いのけながら食べるのだ。日差しは強いが、青空のもとで木陰に座って食べていると、ほんとに遠足気分である。

石窟寺院をもうひとまわりしてバスに戻ると、バスのまわりに土産物売りの子供たちが集まってきた。私を見て日本人だと思ったのだろう。日本語で話しかけてくる。「これ安いよ」

「これタダね」「見るだけ。見るだけ」「貧乏暇なしね」。ここを訪れた日本人観光客が教えたのだろうか。卑猥な言葉を別の意味の言葉だと思って話しかけてくる子供もいる。この子たちは当然学校には行っていないのだろうが、日本では例えば中学生くらいの子供が、弟と思われる子供の面倒を見ながら、絵葉書売りつけにくる。正式に日本語など習ったことなどないはずなのに、えらく日本語がうまい。日本人観光客相手に商売しているうちに自然と覚えたのだと思う。これはまさに「必要こそが語学習得の母である」という格言の典型のような例だが、つい私の英語によるコミュニケーション能力と引き比べてしまった。

現在英語が国際語としてもはやされている。確かに英語が通用する範囲はあらゆる言語のなかで最も広く、その影響は最も強い。しかし、何故現在英語が国際語となっているのかと



いう歴史的事情を考えれば、単にここ四百年ほどたまたま英語を国語としてゐる国が強国だったという事に過ぎないのでないだろうか。大航海時代以降、各地を植民地にしながら西欧近代文明が全世界にひろがったが、そのときはまづポルトガルとスペインの勢力が強かった。そのためその頃に植民地にされた国々、たとえば中南米の国々では、今でもブラジルではポルトガル語がその他の地域ではスペイン語が用いられている。その後、イギリスが一五八八年にスペイン無敵艦隊を破つてからは、世界の覇権はイギリスとフランスに移った。そのため、そのころ植民地にされた国々では今でも英語とフランス語の影響力が大きいのである（たとえばアフリカの諸国ではフランス語が、インド亜大陸では英語がというように）。その後、ドイツと日本が植民地獲得競争に参加したが、それはもう時すでに遅く、さらに第二次世界戦で敗北をき

つしたため、両国語の影響力は大きくはない。第二次世界戦後は、アメリカとソ連の二極構造が長く続いた。しかし、ソ連の言葉ロシア語の影響力は主に東欧を中心とする地域に限られ、その他の資本主義諸国では米語（英語）の影響力が高まった。そんなわけで、一七世紀以降、第二次世界戦以前はイギリスがそれ以降はアメリカがという形で、たまたまほんの四百年のあいだ英語を国語とする国の力が強かつたせいで、今英語が国際語になっているに過ぎないのだ。これは結局は英語を国語とする国の政治・経済・軍事力の問題で、文化の問題ではないのだ。言葉の通用範囲の大小にとって文化の優劣は二次的な意味しかもっていない。今日日本は、経済大国への道を歩みつつある。その結果豊かになった日本人たちが、インドのここアジャンタにまで団体を組んで観光に来ている。その観光客相手に商売してもらうけようとしているこの

インドの女の子は、正式に習いもしないのに必要にせまられて、こんなに日本語がうまくなってしまうのではないか。英語が国際語だというのは所詮この程度のことなのだ。「英語ができるとこれからいろいろ便利だよ」という程度のことなのだ。

### 研究室旅行（三）

—オーランガバード駅の物ごい—

旅行の帰りにオーランガバード駅でプーナ行きのバスを待っていると、物ごいの人たちが「バクシー（金おくれ）」といいながら寄ってきた。子供も多い。慣れないせいかひどく動揺してしまう。どうしようかと迷ってブーツと持っている、異様なものが動いているという感じで、何か近づいてくる。「あれ、何だろう」と思っよく見ると人間の子供だった。異様に見えたのは、その子の足が私の手首ほどの太さもなく、

自分の体重を支えるにはあまりに細すぎるため、四つ足で歩いて近づいてきたせいだったのだ。手にもサンダルのようなものをはめ、まるで水すましが水の上を進むように地面を進んでくる。そして「バクシー」と手を差し出す。彼の顔には全く陰りも卑屈さも見られない。まるで子供のころよく遊んだ犬が私を見上げていたときと同じような目付きで私を見上げている。驚いて一〇ルピー渡してしまう。

こんなときは本当はインドの貧困を始めとしていろんなことを慨嘆すべきなのだろうが、自分でも意外なことに、とつてもアツケラカントした気分だった。つまり、うまく言えないけれど、あえて言葉にすれば「人間もやっぱり動物だったんだ」「人間っていうのはすごいなあ」「やっぱり生きてるんだなあ」というような極めて単純な感慨を持ってしまったのだ。

私はそれまで人間と動物は異なるものだと思

っていた。そしてその上で動物と関わっていた。人間が動物のような行為をするのは卑しいとみなすことに別段奇異な感じはもたなかった。ともかく二本足で立った頭の高さから世界を見ていた。ところが、インドで路上生活者が牛や犬と一緒に地面に寝っころがっていることに慣れ、どこにいても牛や羊や犬がゴロゴロしていることにも慣れてくると、四つんばいになってあるいは地面に寝っころがって世界を見る視点だつてあつていいんじゃないかという気がしてきた。「人間の命は地球より重い」という言葉



があるけれど、それはあくまでも願望であつて、実際は、多くの人間は地球にはいつくばつてゴチャゴチャと生きているというのが本当のところではないか、そのところでは人間や動物も変わりはないのではないか、と思えてきたのである。そして、とても飛躍してしまふのだけれど、輪廻、なかでも動物と人間の生命の連鎖などという発想は、こうした視点の低さというか地面への近さから出てきたのではないか、などと考えてしまったのである。